

【論文】

## ハルネス・マイヤー主導のバウハウスにおける分析重視のデザイン教育

### ANALYSIS-ORIENTED DESIGN EDUCATION AT THE BAUHAUS UNDER HANNES MEYER

富田 英夫\*<sup>1</sup>  
Hideo TOMITA

**Abstract:** This study focuses on the analysis-oriented design education at the Bauhaus under the second director Hannes Meyer (1928–1930). In particular, this paper explores the text by Paul Klee and Wassily Kandinsky in “Bauhaus” magazine from 1928 about the analysis-oriented design education. To start, their text and analytic drawings are discussed. We then consider the similarities between Klee, Kandinsky, and Meyer. As a result of this analysis, we clarified that the scientific analyses of objects and the intention to integrate such analyses existed in the Bauhaus at the end of the 1920s.

**Keywords:** *Bauhaus, Hannes Meyer, Design Education, Wassily Kandinsky, Paul Klee*

バウハウス, ハルネス・マイヤー, デザイン教育, ヴァシリー・カンディンスキー, パウル・クレ

#### 1. 序

##### 1-1. 研究の背景

1928年から1930年までの建築家ハルネス・マイヤー(Hannes Meyer: 1889–1954)が校長を務めた時代のバウハウスは、1919年から1928年までのヴァルター・グロピウス(Walter Gropius: 1883–1969)が校長を務めた時代とは大きく異なっていた。グロピウス時代のバウハウスは初期の表現主義的傾向、1923年以降の構成主義的傾向を特徴としていた。一方で、1928年以降のマイヤー時代のバウハウスは社会的・学術的傾向を特徴としていた。

こういった変化は、二代目校長マイヤーによるバウハウスの組織改革によってもたらされた。マイヤーの改革はバウハウスにおける学術面の強化であり、芸術に加え学術がバウハウスの教育を貫く柱となった。具体的に、予備教育はパウル・クレ(Paul Klee)、ヴァシリー・カンディンスキー(Wassily Kandinsky)、オスカー・シュレンマー(Oskar Schlemmer)らを中心とした教育に再編され、工房教育は織物工房(Weberei)、広告部門(Reklame)、内装部門(Ausbau)、

建築部門(Bauabteilung)に再編された。

再編に伴い、当然のごとく教師たちの辞任や新規の招聘など教育人材の入れ替わりが起こった。新たに招聘された教師の中にはルートヴィッヒ・ヒルベルザイマー(Ludwig Hilberseimer)などマイヤーに近い考えの教師が含まれた一方で、予備教育の中心を担うクレ、カンディンスキー、アルバース、およびシュレンマーはグロピウス時代のバウハウスから引き続きバウハウスで教える事となった。

##### 1-2. 既往研究

著者は、これまでマイヤー時代のバウハウスの建築科における教育内容、学生作品、および教師の作品に注目し、分析を重視する設計手法に特徴があることを明らかにしてきた。そこでは設計にあたり設計対象の生物学的、心理学的、社会学的な分析が重視され、その分析結果をいかに理論的に立体の建築造形として統合するかに関心が払われていた。しかしながら、バウハウス建築部門で学ぶ学生は、予備教育を経て建築を学ぶことになるため、予備教育における分析的なデザイン教育についても把握した上で、建築教育を評価する必要がある。

加えて、現在バウハウスの教師や学生に関する研究は、テーマが細分化され内容も高度化している。その一方で、それらの成果を活用して、多くの芸術家、建築家が集った複合体としてのバウハウスの総体を見る必要もある。

\*1 建築都市工学部建築学科

### 1-3. 研究の目的と方法

このような理由から、本研究では、マイアー主導のバウハウスにおける特徴である分析的デザイン教育の内容を明らかにする。本稿では特に、予備課程において中心的な教育を担ったクレーおよびカンディンスキーにおける分析重視のデザイン教育を明らかにし、その上でマイアー時代のバウハウスにおける分析重視の建築教育との関連を考察する。

研究方法は、予備教育の教師たち自身の著書、および授業を受けた学生たちの著書、およびそれらに関する論文をもとに分析的なデザイン教育を抽出し、その特徴をマイアーの建築教育との関連から考察しなおすという方法を採用。一次資料として、機関紙『バウハウス』に掲載されたバウハウス予備教育に関する記述や論文を分析対象にする。

## 2. 予備教育における分析的デザイン教育

マイアーが校長に就任した後、マイアー自身が編集長としてはじめて出版した機関紙『バウハウス』1928年No.2・3号には、表紙にマイアー時代の新しいバウハウスを担う教師達の顔写真が掲載され、編集に加わったエルンスト・カーロイの巻頭論文「バウハウスは生きている!(*das Bauhaus lebt!*)」が掲載され、新体制によるバウハウスの出発を印象づけた。つづいて、基礎教育を担当するアルバース、カンディンスキー、クレー、シュレンマー等の論文が掲載された。途中、マイアー「ADGB 連合学校」設計競技案(1928)も紹介されたが、この号の中心テーマはバウハウスの予備教育の内容を紹介することにあつた。そこで以下の各節において、この号におけるクレーおよびカンディンスキーのテキストを見ていくことにする。

### 2-1. クレー「芸術の分野における精密な実験」

クレーは1928年の『バウハウス』2・3号において「芸術の分野における精密な実験」(*Exakte Versuche im Bereich der Kunst*)と題したテキストを書いている。この中で彼は、「直観が精密な探究と結びつくと、それは精密な探究の進行を早める」とした上で、芸術分野においては「精密な探究」の余地が残ると記す。クレーのいう「精密な探究」とは別のクレーの言葉でより分かりやすくいえば「精密な知」すなわち科学ということになる。クレーの描いたバウハウスのカリキュラムの図式において、カリキュラムを左右から規定するように、芸術と「精密な知」(科学)が配置されていた(向井, 2018)。この芸術と科学が規定するカリキュラムという考え方はマイアーが1930年に描いたバウハウスのカリキュラムの図式と同じである。このことから、当時のバウハウスのデザイン教育における考え方として、芸術と科学のバランスをとっていくという方向性が共有されていたと考えてよいだろう。そういった考え方が誰の影響によるものか等については不明であるが、芸術—科学

という二つの強固な軸が共有されていた事は注目して良いだろう。

そして、クレーは機関紙『バウハウス』のテキストにおいて、次のように続ける。

「数学と物理学は、われわれに、まず第一に機能に関心を向け、出来上がった形態を無視するようにと強いる—それは有益な影響である。代数、幾何学、および力学の問題は、印象的なものではなく、本質的なもの、機能的なものに人を導くという意味で教育的である」

この内容は、「精密な探究」と表される科学が、芸術にとってより本質に近づくために有益なものにとらえられていると読める。より踏み込んで読み込むと、このテキストの表現には校長マイアーと同じ種類の考えを認めることができる。

マイアーは建築設計においては、徹底的に機能的であることを求めた。すなわち、設計において部屋の必要換気量と時間ごとの必要な日照量から開口部の向きと大きさは自動的に決定されるのであって、決して美学的な観点から外観が設計されるべきではない、というような種類の考え方である。クレーのテキストの前半部分では、数学と物理学が機能に関心を向け、出来上がった形態を無視するようにと強いると書いてあるが、これはマイアー流に言い換えれば、形態とは、機能面を満たすための物理量を導き出す計算式の結果から生み出されるものに過ぎない、となるのではないか。

さらに、次に引用するクレーのテキストの最後の部分では、今度は機関紙『バウハウス』の同じ号の巻頭を飾ったカーロイの「バウハウスは生きている!」と同じ考えを読み取ることができるのである。

「しかし、気を静めよう。“構成的 (*konstruktiv*)”とは“総合的 (*total*)”ということではない。〈長所〉は、精密さをつちかうことによって、われわれが芸術の特殊研究の基礎を築いたことである。未知の値“X”を算入して、その長所は、必要に迫られて生まれるのである。

学校は存続する (*die Schule lebt*)。学校万歳!

ここで「構成的」(*konstruktiv*)という言葉は、構成主義と読み替えられるだろう。そうすると、クレーは、構成主義はバウハウスが求める総合ではないと理していることと理解することもできる。じつはこの論調は、そのままカーロイが巻頭論文で展開したものなのである。すなわち、グロピウスが校長の時代にみられる構成主義の美学(直行座標系や単純な幾何学形態で造形する)「バウハウス様式」のもとにすべての造形を総合するのではなく、様式概念をできるだけ遠ざけた先に生活に根差した造形が生まれるという考えである。そもそも、末文の「学校は存続する (*die Schule lebt*)」がそのままカーロイ論文のタイトル「バウハ

ウスは生きている!(das Bauhaus lebt!)」に対応するものであろうことは論を待たない。

## 2-2. カンディンスキー「芸術教育」

### (1) カンディンスキーのテキスト

カンディンスキーは1928年の『バウハウス』2・3号において「芸術教育」(Kustpädagogik)と題したテキストを書いている。この中で彼は、「極端な専門化とその結果としての分裂」を「19世紀の影響力を持つ遺産」とした上で、次のように記す。

「いかなる教育にあっても、第一の目的は、二つの方法で考える能力をつちかうことではなければならない。

1. 分析的方法
2. 総合的方法

それゆえ、われわれは、19世紀の遺産(分析=分裂)をいっそう活用し、同時に、それを総合的な観点に立っておぎない、補強しなければならない」

ここでは分析的な方法と、総合的な方法の両方の活用がとりわけ重要視されている事がわかる。カンディンスキーの教育における「分析的デッサン」(analytisches Zeichnen, Fig. 1)は、1920年代後半には彼の重要な教育方法として確立されていたようだが、1928年の『バウハウス』2・3号においても要点が記された。その簡潔に要約された内容をみると、課題の最初の導入段階から、次の段階、そして発展した最後の段階で、それぞれ課題は異なるものの一貫した特徴がみられる(Fig. 2)。それらは内容としては、分析により個々の部分の特徴を抽出しつつも、抽出された分析結果をもとに全体を再構成するというもので、「分析的デッサン」という名称ではあるが、分析的方法と総合的方法の両方を含む内容である事がわかる。

「芸術教育」の中盤から後半にかけて、分析的方法と総合的方法の教育上の意義がより詳しくのべてある。

「どの分野においても、理想的教育というものとは分かちがたく結びつけられねばならぬ二つの部分からならねばならない、ということこれをこれ以上証明する必要はあるまい。それは次のものである。

1. 分析的であると同時に、総合的に観察し、試行し、行動する能力をつちかう
2. 対応する専門分野の知識を組織的に伝達し、獲得する」

カンディンスキーがこの部分で、1の「分析と総合の方法」と2の「専門分野の知識の組織的伝達と獲得」を自身が教育を実践した絵画の分野だけでなく、芸術の「どの分野」にもあてはまることとして普遍化している事には注目してよい。なぜならば、カンディンスキーのいう芸術には当然、前年の1927年からバウハウスの正規教育に加えられた建築も含まれるものと考えられるからである。

### (2) 校長マイアーのテキスト

1927年のバウハウス建築科設立にあたり、その教育カ

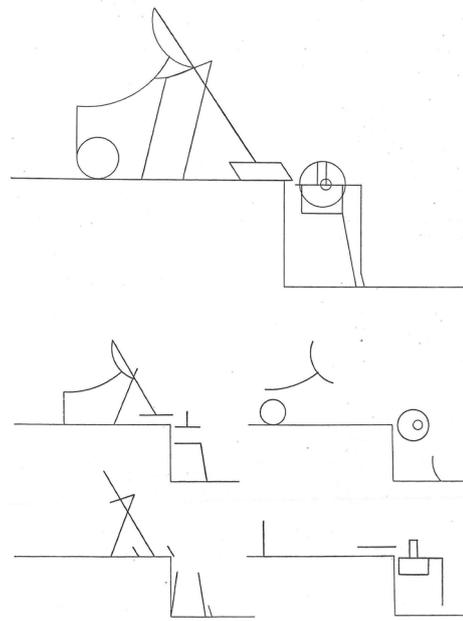


Fig. 1 Four drawings from Kandinsky's course: analytical drawing. Top: Main Theme. Below: four variations of construction, achieved by eliminating individual construction components. Variations to illustrate four totally different tension varieties of the main theme.

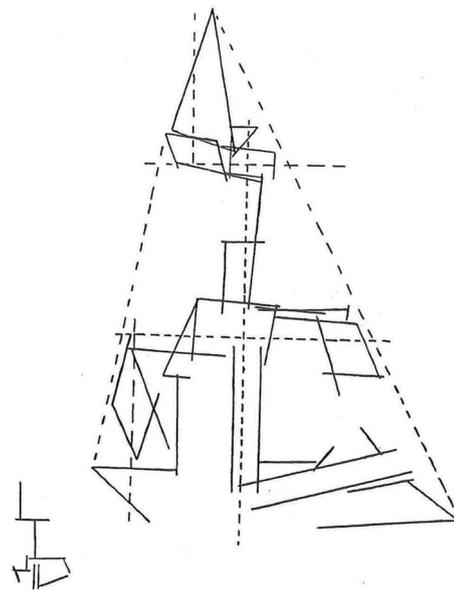


Fig. 2 Third stage: Objects completely translated into energy tensions; complicated constructions with displacements in individual components; over-all scheme made visible by dashed lines. Below: scheme. (Drawing by Fritz Fiszmer)

リキュラムを作ったのは1927年に教師として招聘され建築科の主任となったマイアーであり、当時の校長のグロピウスではなかった。そのマイアーの建築教育の特徴は一言

でいえば「分析的な建築設計」であった。

マイアーは設計前に、設計対象の敷地の地質、日照、風向、および地形の特性を徹底的に調査し、設計対象の用途に求められる空間的特性、利用者の社会的関係性、行動特性の調査をもとに設計対象の建築を一旦、最小の構成単位（多くの場合、部屋となる）にまで分解した。そして、その上でそれらを唯一無二の敷地の上で再構成したのである。マイアーがこの方法を使って設計した代表的な作品には「ペーターズシューレ」設計競技案（1927年）や「ADGB連合学校」設計競技案（1928年）があった。

このようなマイアー自身の設計理論がそのままバウハウスの建築教育にも反映されており、建築科の学生は設計対象となる家や集合住宅や農場や学校などの人の動きを分析し、図式として表現し、それぞれの敷地において最適な方法で建築として統合した。そういった学生作品はマイアーの設計方法を単純化・簡略化して再生産しただけと、否定的な評価をされることもある。しかし、マイアー時代の建築学生の中には、分析・統合の過程においてマイアーの教育成果を真にオリジナルな方法として発展させた学生達も存在した。フィリップ・トルツィナーとティボール・ヴァイナーはマイアーが教授した典型的な手法を用いて設計対象の分析を行った上で、それらの分析結果を一つの建築において統合し形づくの際に、統合のプロセスを図面に示すという当時としては全く新しい成果を提示していた(富田、2016)。

### 3. 結

以上、述べてきたように、カンディンスキーとクレーの1928年『バウハウス』誌に掲載された分析重視のデザイン教育に関するテキストを分析し、同時期の『バウハウス』誌の編集を務めた校長マイアーとカーロイの志向との類似性を指摘した。本稿では論じきれなかったが、同時期のバウハウス予備教育を担当したシュレンマーの講義「人間」等にも同様の分析重視の傾向を読み取ることができる( Fig. 3)。

本研究で注目したクレーやカンディンスキーらによるバウハウスの基礎をなす予備教育は、そもそも分析的かつ科学的なものであった。そのようなバウハウスのなかで、1927年になりマイアー主導でようやく設立された建築部門が、分析的・科学的なカリキュラムを採ったのは予備教育の流れを正當に引き継いだという意味で、しごく当然の流れだったと言える。

むしろ、1930年夏のマイアー辞任の際にはカンディンスキーも反マイアーの動きに加担していたことから、本論文で指摘したような反目する二人が共通する理念もあったという見方にたいして批判があるのは承知している(なおクレーはマイアーと良好な関係を保っていた)。しかしながら、そのような政治的ともいえる人間関係に注目しすぎ

てデザイン教育の最先端のバウハウスで起こった壮大な実験を矮小化しすぎていないだろうか。そのような意識のもと、本稿では、1920年代末のバウハウスという最先端の教育機関において超越的に存在した分析重視のデザイン教育および同時に存在する統合への意思を明らかにした。

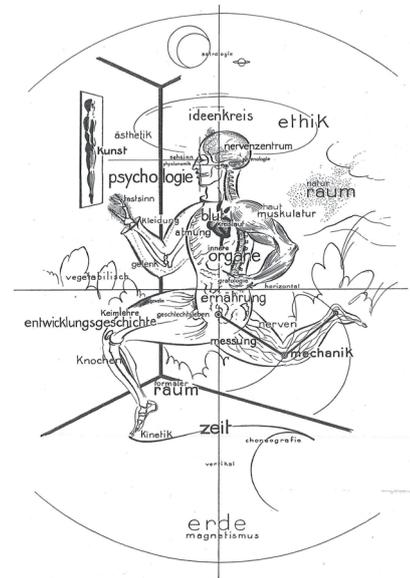


Fig. 3 Oskar Schlemmer, schematic overview of the class "The human being"

### 謝辞

JSPS 科研費 JP17K06764 「社会主義圏で活躍した卒業生の資料によるマイアー主導バウハウス建築教育の総合的解明」(代表：富田英夫)による成果である記して感謝申し上げます。

### 図版出典

Figs.1, 2, 3: *bauhaus zeitschrift für gestaltung*, 2/3, 1928.

### 参考文献

- 1) Ernst Kallai, "bauhaus lebt!", *bauhaus zeitschrift für gestaltung*, 2/3, 2. Jahrgang, 1928, pp. 1-2.
- 2) Wassily Kandinsky, "kunstpädagogik", *bauhaus zeitschrift für gestaltung*, op. cit., pp. 8-11. (邦訳は以下を参照: ハンス・M. ウィングラー編著『バウハウス』バウハウス翻訳委員会、造形社、1969年、pp. 155-156)
- 3) Paul Klee, "Exakte Versuche im Bereich der Kunst", *bauhaus zeitschrift für gestaltung*, op. cit., p. 17. (邦訳は以下を参照: 『バウハウス』前掲書、pp. 156-157)
- 4) 二上正司「バウハウスにおけるカンディンスキーの造形教育」『美術教育』1990年、260号、pp. 7-17.
- 5) 富田英夫「P. トルツィナー、T. ヴァイナー「社会主義国家の工場労働者用共同住宅」案(1930)における科学的分析結果の建築空間化」『日本建築学会計画系論文集』81(719)、2016年1月、pp. 203-213.
- 6) セゾン美術館編『Bauhaus 1919-1933』(展覧会カタログ)、セゾン美術館、1995.
- 7) 向井周太郎「バウハウスー〈生〉の全体性への問い」『バウハウスの人々』みすず書房、2018年、pp. 344-365.